



蟹江 憲史

かえのりちか 国際  
関係論、地球システムガバ  
ナンス。編書に「持続可能な  
開発目標とは何か」。51歳。

透明な世界は、今に始まったことではない。2016年の初めに、熊本地震が数カ月後に起こると誰が予想できたであろうか。地震で状況は一変し、私の家族も、当時熊本にあった先祖代々の家を手放さざるを得なくなりました。発生のわずかな週間前に熊本で法事を執り行ったことが信じられないほどであった。

い。残念ながら、この状況は今後も続いていくであろう。資源の利用や汚染物質の排出から、巨大な建造物や社会システムのつくり方に至るまで、さまざまな形で人間の活動範囲は大きくなっている。それはグローバル化でさらに増幅され、その結果が災禍として人間に跳ね返ってきているという説が広がる。

一つは、原因は同じでも、結果の表れ方が場所や時間によって異なり、いつどこで表れるのか予想がつかない現象が頻発することにある。気候変動の影響が、場所によっては猛暑となり、別の場所では干ばつや洪水、あるいは海面上昇として表れたりするというのは、その典型的な例である。

換えていく言葉である。「強靱」と訳すことがあるが、ただ「強さ」を示す言葉でもない。いかなれば「しなやかな強さ」である。災害が起こっても、そこから立ち直る力であり、立ち直るための反発力といってもよい。コロナ禍の先には、ただコロナ襲来前の世界に戻るのではなく、働き方や医療体制も改善された「よりよい復興」を遂げる、しかも、それを早急に遂げていくような反発力である。つまり、災害の影響を最小限に抑え、それを糧に、より強くなっていくような「しなやかな強さ」である。

## 高めたい「しなやかな強さ」

昨年7月の豪雨もそうである。気候変動の影響で、気候災害の頻度や強度がどんどん増していくというシミュレーションはあるが、それがいつどこにやってくるかはわからない。21世紀は「災害の世紀」ともいわれるが、コロナ禍のような健康に関する災害を含め、この言葉を実感する時代に入ったと認めざるを得ない。

がつている。「人類世（あるいは人類新世）」と呼ばれる、新たな地質年代の登場である。地質年代という、恐竜のいたジュラ紀や白亜紀といった時代の話だと思いがちだが、それだけではない。地球という惑星の歴史の中で、初めて、人類が地球の命運を握る年代に入ったというのである。その特徴の

こうした時代に、ついにわれわれは放り出されてしまった。コロナ禍の後には、また別の災害が起こるリスクも高い。そんな不透明で不確実な時代を生き抜くには、なにが必要なのだろうか。

答えの一つは「レジリエンス」を高めることにあると私は思う。レジリエンスは、なかなか日本語に置き

2021年が幕を開けた。年頭にあたって、新年の抱負を考える方は多いと思うが、今年は例年と様子が違ったことだろう。先行きがあまりに不透明である。コロナ禍が一体いつ収束するのか、その後どのような世界が待っているのか。今年の目標を立てようにも、周りの状況がわからないと定まりきらない。

こうした状況をみると、個人の目標も、いかに社会全体の状況や環境の影響を大きく受けているか、がわかる。人間はひとりで生きているようでも、多くの人に無意識のうちに支えられ、互いに影響を及ぼしあっている。そのことが、今ほど実感できる時期はそう多くない。人は社会的な生き物なのである。

しかし考えてみれば、先行きが不

挫折を味わうほど、打たれ強いたくましが備わっていくことは少なくない。とはいえ、度重なる災禍を「打たれば打たれるほど」と受け止めることも簡単でないだろう。それでも未来を見つめ、「しなやかな強さ」を高める社会や個人でありたい。そんなことを思う年始である。